

金子 熊夫

かねこ・くまお=外交評論家、エネルギー戦略研究会会長、EEE会議代表。元外交官、初代外務省原子力課長、元東海大学教授。ハーバード法科大学院卒。79歳。kaneko@eeecom.org



福島の被災地を訪れた金子熊夫氏。写真は、福島県内の汚染土が入った黒い袋。

(フレコンバッグ)が至る所に山積みになっていることだ。こうした仮置き場は福島県内に約1200カ所も設けられているという。これらの汚染土に含まれている放射性物質(主にセシウム)は低レベルで半減期も比較的短い。政府の方針で、いずれ中間貯蔵施設に運び込まれ、そこで最長30年間保管されることになっている。

時評 ウェーブ

2016.3.9

くと、施設が完成するのは数十年も先ということになり、福島復興の大きな障害となる。

そこで、放射線問題の専門家ではない筆者も、2年ほど前から、何かうまい解決策はないものかと一人で色々思索してきたが、昨年夏、ふとあることに気が付いた。

日本は四方海に囲まれているので、海を何とか利用できないものか。と、海の中に放射

発想の大転換 原発廃棄物処分

性廃棄物を直接投棄したり処分場を造るのは論外で、そもそも「海洋投棄規制条約」という国際条約ではっきり禁止されているが、これに抵触しない形で安全に処分する方法があるのではないか。

実は、筆者は四十年前、外務省で初代の海洋・環境問題担当官の職にあり、歴史的な国連人間環

境会議(1972年6月、ストックホルム)に政府代表として出席したが、その半年後ロンドンで開催された海洋投棄規制条約作成外、交会議にも出席し、条文作りに直接関与した。

条約の目的は海洋環境の保全であり、「海洋投棄」の定義は、船で搬送して海に投棄するとか、人工島を造ってそこに投棄・貯蔵す

り、歴史的な国連人間環

のところに長い堤防を築き、陸地と一体化させ、内側を掘ってその中に廃棄物を埋める。勿論海水に溶けて出ないような特殊な工法で。そうすれば防潮堤にもなるし、海洋を汚染しないから漁業にも支障とならない。

人工島を造ってそこに投棄・貯蔵す

り、歴史的な国連人間環

方法や技術はすでに十分確立していると言っよい。この方式の最大のメリットは、地権問題や漁業権問題が絡まず、用地確保が容易なことだ。

日本では、ロンドン条約で海中も海底も全面的に禁止されているという誤った先入感から、こうした方式が本格的に検討されてこなかったようだが、ヨーロッパでは、例えばスウェーデンやフィンランドの原子力発電所でこの方式を試験的に採用しており、筆者も現地を視察したことがある。米国でも、かなり前から海底下の利用については専門的な調査研究が進んでおり、陸地より地質が安定している安全だという研究結果が出ている。日本でも、この際発想の大転換を図り、右に述べたような方法で、各種の放射性廃棄物の安全かつ効率的な貯蔵・処分を具体化するべきだと思っ。

り、歴史的な国連人間環